

# 心に障がいがある小学校特別支援学級児の食行動に関する実態調査

岡本 秀己

## 緒言

平成 27 年 5 月 1 日現在、小学校の特別支援学級の在籍する発達障がい児の割合は、全障がい児の約 46% となっている。また、学習障害 (LD)、注意欠陥/多動性障害 (ADHD)、高機能自閉症等、自閉症、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童で通常の学級に在籍し、通級によって特別支援教育を受けている児童は 54% である<sup>1)</sup>。そこで、障害の重度・重複化や多様化、LD や注意欠陥・多動性障害 (ADHD) 等の児童生徒への対応や、早期からの教育的対応に関する要望の高まりから、平成 19 年に学校教育法に「特別支援教育」が位置づけられた<sup>2)</sup>。

特別支援教育は、障害のある幼児・児童・生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものとある。また、特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものとする<sup>3)</sup>。

一方、平成 17 年に食育基本法が制定され、子どもたちが豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていくためには、何よりも「食」が重要であり、改めて、食育を生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている<sup>3)</sup>。食育はあらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである。

特別支援教育では教育を施すとともに、「障害によ

る学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授ける」ことを目的とするとされ、これは、個々の幼児・児童・生徒の「自立活動」の指導が中心として行われる。自立活動の内容には、「生活のリズムや生活習慣の形成に関すること」や「健康状態の維持・改善に関すること」等が含まれており、特別支援児には特に「食育」が不可欠であると考えられる。

そこで、特別支援学級に対する食育を充実させるため、まず特別支援学級の食育の現状及びその児童の食に関する調査をし、問題を明らかにすることを目的とした。

## 方法

### 1. 特別支援学級の食育実態

#### 1-1 対象

彦根市の全小学校 (17 校) に質問項目を配布し、校長あるいは栄養教諭、特別支援学級担任等に回答を求めた。特別支援児食育実態の回収率は 82% であった。なお、この調査は滋賀県立大学倫理委員会の承認 (承認番号 212 号) を受け実施し、彦根市教育委員会および小学校学校長の許可を得て行われたものである。

#### 1-2 質問項目

##### ①特別支援学級の現状

「特別支援学級児数」、「主な障害」、「特別支援学級数」、「クラス分けの基準」、「特別支援学級担任教諭数」、「支援員の有無及び人数」、「一般学級で給食を食べる日の有無及びその日数」とした。

##### ②食に関する指導

「野菜等の栽培及び収穫した野菜などの利用法」、「食品生産過程の見学・体験の有無及びその内容」、「特別支援学級担任が食に関する指導を行う頻度」、「食に関する指導の際必要だと感じたもの」とした。

##### ③その他

「特別支援学級児に対する食に関する指導における

他教諭との連携]、「栄養教諭に期待すること」、「特別支援学級児に対する食に関する指導の重要性」とした。

## 2. 特別支援児の個別状況調査

### 2-1 対象

特別支援学級児の個別の個別状況調査の回収率は85%であった。回答があった小学校に在籍する支援児は127名で(表-1)、担任等の記述による個別回答があったものは108名であった。

表-1 学年別特別支援学級児数

1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
18人	29人	26人	21人	15人	18人	127人

### 2-2 質問項目

- ①特別支援児個別の学年、性別、身長、体重。
- ②障害の種類とその程度、学習の理解度、授業の集中度、授業中の問題行動の有無とその内容
- ③給食時の様子(手洗い、準備、挨拶、箸の使い方、かたづけ等を含む)
- ④好き嫌い、食への強いこだわり等とした。

## 結果と考察

### 1. 特別支援学級の食育実態調査

#### 1-1 特別支援児の主な障害とクラス数・クラス分けの基準、担当教諭、支援員の有無等

特別支援児において、知的障害が最も多く65人(51%)で、次いで情緒障害が24人(19%)、自閉性障害が10人(8%)であった(表-2)

1校当たりの特別支援学級数は3クラスが8校と最も多く、クラス分けは「障害別」で行われていた。また、担当教諭は各学級定員8名対し、1人で、その他にひとつの学校につき支援員1名が配属されていた。

給食を普通学級で食べる日は「決まっていない」学校が多く、基本的に特別支援学級児は特別支援学級で給食を食べていた。

#### 1-2 特別支援学級の食に関する指導の現状

14校すべての学校が「野菜や果物を栽培している」と回答した。「最近栽培した野菜・果物」を表-3に

表-2 主な障害の人数

	人数	%
知的障害	65	51
肢体不自由	9	7
病弱・身体虚弱	1	1
視覚障害	2	2
聴覚障害	2	2
自閉性障害	10	8
レット障害	0	0
小児期崩壊性障害	0	0
アスペルガー障害	2	2
情緒障害	24	19
言語障害	0	0
学習障害	1	1
注意欠陥障害	5	4
広汎性発達障害	5	4
トゥーンレット障害	1	1

表-3 野菜や果物の栽培(校)

作物	校数
さつまいも	7
きゅうり	5
大根	4
トマト	4
ピーマン	4
ミニトマト	4
なす	3
枝豆	2
かぼちゃ	2
玉ねぎ	2
とうもろこし	2
落花生	2

示す。栽培したものでは、さつまいもが最も多く、他にも様々なものを栽培していた。

「収穫した野菜や果物の利用方法」は表-4に示すように、「調理実習」や「給食の食材」として利用している学校が多く見られた。収穫した野菜などは、調理実習や給食の食材として使われているケースが多かった。

表-5に示した特別支援学級担任による食育の頻度は、別途調査した一般学級よりはるかに多かったが、担任によっては、年に1回という学校が2校あった。

表-4 収穫した野菜の使い方 (校)

持ち帰らせる	7
調理実習	12
給食の食材	6
その他	2
図工の材料	1
洗って食べる	1

表-5 特別支援学級担任の食育の頻度 (校)

1週間に1回	3
2週間に1回	1
1か月に1回	2
1学期に1回	1
1年に1回	2
その他	5
ほぼ毎日	1
給食を食べながら	1
適宜	1
必要に応じて随時	1

1-3 その他

特別支援学級担任が他の学級担任、校長・教頭との「食育の連携」はあまりないが、学校栄養職員・栄養教諭に対しては不十分から十分の意見に分かれたがそれなりに、関わりがあることが分かった (表省略)。

特別支援学級担任が栄養教諭に期待することは「支援学級での授業の増加」「個人に応じた指導」、「障害に対する知識・理解」「食の指導のための教材・ツール」が多かった (表-6)。

表-7に示した、特別支援学級の担任が特別支援児に対する食の指導の重要性については、回答のあった14校中「重要」と答えた担任は9名、「やや重要」と答えた担任が4名と非常に食育の重要性を感じていることが明らかとなった。

表-6 特別支援学級担任が栄養教諭に期待すること (校) 複数回答

個人に応じた指導	6
障害に対する知識・理解	5
支援学級での授業等の増加	10
食の指導のための教材・ツール	5
教員の食の指導のための研修	3
特にない	0
その他	1

表-7 担任が感じる特別支援児に対する食の指導の重要性 (5段階評価)

重要でない	0
やや重要でない	0
どちらでもない	1
やや重要	4
重要	9

2. 特別支援児の個別状況調査

2-1 児童の基本情報

特別支援児童は女児より、男児の方が多く (表-8)、身長と体重から算出した体格指数はやせ型25%、普通約50%、太型25%であった (表-9)。以下、知的障害、身体障害は省略し、発達障害についてのみ示す。(表-14は除く)。

学習の理解度を表-11に示す。担任から見ても、「理解できていない」が自閉症で70%、ADHDで57%、LDで33%で、反対に「理解できている」と回答したのは、ASP、広汎性発達障害が多かった。

表-12に示したように、授業時に「あまり、ほぼ集中できない」が自閉症58%、ASP60%、情緒障害60%、LD100%、ADHD79%、広汎性発達障害80%であった。

また、表-13に示したようにほとんどの生徒に問題行動があり、表-14に示した問題行動の内容で知的障害、身体障害と比べると、「感覚過敏」「感情コントロール」「大声・奇声」など感情に関するコントロールやその結果としての行動が多いことが分かった。

表-8 障がい児 学年別、性別人数

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
男	11	20	15	13	5	13
女	6	5	4	5	7	2
合計	17	25	21	18	12	15
%	16%	23%	19%	17%	11%	14%

表-9 身体の体格指数 5段階 (ローレル指数による分類)

	やせすぎ	やややせ	ふつう	やや太り	太り	無回答
%	3	22	49	13	12	1

表-10 発達障害別体格指数 (%)

%	知的障害	身体障害	発達障害	その他
	n=65	n=17	n=64	n=3
やせすぎ	2	6	2	33
やややせ	28	18	19	33
ふつう	48	53	52	33
やや太り	14	12	9	0
太りすぎ	9	12	17	0
無回答	0	0	2	0

  

%	身体障害				発達障害					
	肢体不自由	病弱・身体虚弱	視覚障害	聴覚障害	自閉症	ASP	情緒障害	LD	ADHD	広汎性発達障害
	n=11	n=1	n=3	n=2	n=27	n=10	n=5	n=3	n=14	n=5
やせすぎ	9	0	0	0	4	0	0	0	0	0
やややせ	18	0	33	0	30	10	20	33	7	0
ふつう	36	100	67	100	41	60	60	67	57	60
やや太り	18	0	0	0	11	0	20	0	7	20
太りすぎ	18	0	0	0	15	20	0	0	29	20
無回答	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0

表-11 発達障がい児の学習内容の理解度 (%)

	発達障害					
	自閉症	ASP	情緒障害	LD	ADHD	広汎性発達障害
	n=27	n=10	n=5	n=3	n=14	n=5
理解できていない	70	20	20	33	57	0
どちらともいえない	22	40	60	67	21	0
理解できている	0	40	20	0	14	40
無回答	7	0	0	0	7	60

表-12 発達障がい児の授業中の様子 (%)

	発達障害 (%)					
	自閉症	ASP	情緒障害	LD	ADHD	広汎性発達障害
	n=27	n=10	n=5	n=3	n=14	n=5
ほぼ集中できる	42	30	40	0	21	20
あまり集中できない	50	50	40	67	79	60
全く集中できない	8	10	20	33	0	20
無回答	0	10	0	0	0	0

## 2.2 特別支援児個別の給食時や食におけるこだわり

### 2-2-1 食に関する指導について

「食の指導」は普通学級で39%、あるいは特別支援教室で49%が受けていたが、全く「経験なし」という

児童も見られた(表-15)

表-16に指導者(特別支援学級の担任等)が最も必要と思う指導をみると、自閉症は、全体に分散するが特に「好き嫌いをなくす」、ASPでは「楽しく食べる」、

表-13 授業時間問題行動 (%)

	発達障害 (%)					
	自閉症 n=27	ASP n=10	情緒障害 n=5	LD n=3	ADHD n=14	広汎性 発達障害 n=5
ある	81	90	80	100	93	80
ない	19	10	20	0	7	20

表-14 問題行動の内容 (のべ人数) (全障害)

行動	知的障害	身体障害	発達障害	行動	知的障害	身体障害	発達障害
姿勢	4	1	3	私語	6	0	5
こだわり	1	0	2	大声・奇声	4	1	9
ぼんやりする	4	0	4	自傷行為	2	1	1
注意欠陥	7	0	5	破壊	1	1	2
集中力	9	2	11	嫌なことはしない	11	1	8
多動	11	1	13	学習・理解困難	2	0	5
感覚過敏	0	0	3	身体的問題	7	6	2
感情コントロール	5	2	10	その他	5	0	11

表-15 児童の食に関する指導の経験 n=127

	普通学級で	特別支援学級で	合同授業等	経験なし
人数	49	62	3	13
%	39%	49%	2%	10%

表-16 指導者 (特別支援の担任) が食に関して最も必要と思う指導人数 (%)

	発達障害					
	自閉症 n=27	ASP n=10	情緒障害 n=5	LD n=3	ADHD n=14	広汎性 発達障害 n=5
残さず食べる	3(11%)	0	0	0	0	2(40%)
好き嫌いをなくす	7(26%)	0	2(40%)	1(33%)	3(21%)	0
落ち着いて食べる	1(4%)	0	0	0	1(7%)	0
楽しく食べる	2(7%)	3(30%)	0	0	2(14%)	0
当番の仕事ができる	1(4%)	1(10%)	1(20%)	0	2(14%)	0
その他	3(11%)	4(40%)	1(20%)	0	2(14%)	0
無回答	1(4%)	0	0	0	0	0
複数回答	6(22%)	2(20%)	1(20%)	2(67%)	2(14%)	2(40%)
特になし	3(11%)	0	0	0	2(14%)	1(20%)

情緒障害では「好き嫌いをなくす」、ADHDでは、多岐に分散していた。広汎性発達障害もn数が少ないがあまり食における問題点は少なかったがその障害に応じて、指導する内容に特徴が認められた。

表-17 でみると約半数の児童は普通学級で給食を食べる機会があったが、その回数は月に1回から2日に1回と差が大きく、学校長、養護教諭、栄養教諭等の

考え方などで異なってくるものと考えられる。

また、給食で苦手な食べ物があると答えた「たくさんある」と答えたのは、圧倒的に発達障がい児であった(33%)。表-18 から特に「魚」、「肉」、「野菜」や「こんにゃく」など「食感」感覚的に嫌いなものがあることが分かった。また、食へのこだわりを表-19 に示したが、身体障害児では見られず、知的障害・発達障害

表-17 普通学級で給食を食べる回数

	ある	ない							
人数	49	59							
%	45%	55%							
頻度 (人数)	1回/月	2回/月	4回/月	8回/月	16回/月	20回/月	4~8回/月	8~回/月	無回答
	7	2	13	10	1	10	1	3	2

表-18 特に苦手な食べ物(人)

食品	知的障害 71人			身体障害 17人			発達障害 73人		
	食品	知的障害	身体障害	食品	知的障害	身体障害	食品	知的障害	身体障害
ごはん		2	0	2	2	0	2	1	0
パン		3	0	3	6	4	6	6	6
肉		2	1	5	2	0	3	2	0
魚		8	0	14	2	1	0	2	1
卵		4	1	6	3	1	2	3	1
牛乳・乳製品		5	2	5	1	0	3	1	0
野菜		17	3	26	1	1	10	1	1
きのこ類		2	2	6	5	2	2	5	2
豆		3	0	2					

表-19 障害別にみた食べ物へのこだわりの内容人数(%)

	知的障害 n=41	身体障害 n=3	発達障害 n=54
温度	0	0	0
食感	7(25)	0	16(29)
見た目	2(7)	0	6(11)
食器の形等	0	0	0
環境	1(4)	0	1(2)
食材	13(46)	1(33)	22(43)
調理方法	1(4)	0	5(9)
相手	2(7)	1(33)	2(4)
その他	2(7)	1(33)	2(4)

で特に多かった。ともにやはり、「食感」「食材」で、これを発達障がい児だけで見てみたものを表-20に示す。表-21に給食時の問題行動を示した。自閉症・広汎性発達障害では「食材」、ASPでは「食感」、情緒障害、LD、ADHDでは「食材」にこだわるといった特徴がみられた。

「給食時の問題行動」は、知的障がい児、発達障がい児で40%程度みられ、内訳は自閉症 ASP ADHDでは「食事マナー」が多く、広汎性発達障害では特に問題はなかった。また、自閉症では「話しすぎる」、

ADHDでは「食事意欲」が挙げられていた。

## 要約

発達障がいがある子どもを対象とした特別ニーズ教育としての「生きる力」を育む食育支援の方法を探ることを目的とした。

そこで、彦根市立小学校の全校(17校)調査を行い、まず特別支援学級児の障害や程度、食育の機会、好き嫌いや問題行動、給食時の様子等の実態調査を行った。

養護教諭記入による特別支援学級児個別調査では学習内容の理解は知的障がい児89%、身体障がい児65%、発達障がい児48%が難しいとあり、発達障害別では、特に自閉症70%、ADHD57%で理解ができていないとあった。給食での問題点としては「好き嫌いをなくす」「残さず食べる」で、発達障害別にみると、自閉症では「好き嫌いをなくす」、アスペルガー症候群では「楽しく食べる」、情緒障害では「当番の仕事ができる」、ADHDでは「好き嫌いをなくす」「落ち着いて食べる」「楽しく食べる」「当番の仕事ができる」という指導が必要という回答が多く、障害の種類によって傾向は異なった。給食時の問題行動のあるもの

表-20 発達障がい児の食へのこだわり人数 (%)

	発達障害 (%)					
	自閉症 n=21	ASP n=9	情緒障害 n=3	LD n=5	ADHD n=14	広汎性発達障害 n=2
温度	0	0	0	0	0	0
食感	6(29)	3(33)	1(33)	1(20)	3(21)	2(100)
見た目	3(14)	1(11)	0	0	2(14)	0
食器の形等	0	0	0	0	0	0
環境	0	0	0	0	1(7)	0
食材	9(43)	2(22)	2(67)	3(60)	6(43)	0
調理方法	1(5)	2(22)	0	1(20)	1(7)	0
相手	1(5)	0	0	0	1(7)	0
その他	1(5)	1(11)	0	0	0	0

表-21 障がい児、および発達障がい児の給食時の問題行動人数 (%)

	知的障害 n=65	身体障害 n=17	発達障害 n=64	その他 n=3
	ある	25(38%)	5(29%)	27(42%)
ない	40(62%)	12(71%)	37(58%)	2(67%)

  

	発達障害					
	自閉症 n=27	ASP n=10	情緒障害 n=5	LD n=3	ADHD n=14	広汎性発達障害 n=5
ある	9(33%)	4(40%)	4(80%)	2(67%)	8(57%)	0
ない	18(67%)	6(60%)	2(20%)	1(33%)	6(43%)	5(100%)

表-22 給食時の発達障がい児の問題行動人数 (%)

	自閉症 n=14	ASP n=6	情緒障害 n=4	LD n=2	ADHD n=10
	食事マナー	6(43%)	2(33%)	1(25%)	0
姿勢	1(7%)	1(17%)	0	0	1(10%)
咀嚼	1(7%)	0	0	0	0
食事意欲	0	0	1(25%)	0	3(30%)
食べる量	0	1(17%)	0	1(50%)	1(10%)
食べる速さ	0	0	0	0	0
話しすぎる	2(14%)	0	0	0	0
こだわり	0	0	1(25%)	0	0
集中力	1(7%)	1(17%)	0	0	1(10%)
パニック	1(7%)	0	0	1(50%)	0
その他	2(14%)	1(17%)	1(25%)	0	0

は、知的障害 38%、身体障害 29%、発達障害 42%で、発達障がい児のうち情緒障害、LD で特に多かった。

食育に関しては、重要と考えるが教材・ツールがないこと、また栄養教諭との連携が必要と考える担任があったことは今後、考えていく必要がある。

今後、食べる力を育むすなわち生きる力を育む食を

通した特別支援教育についての研究につなげたい。

#### 謝辞

本研究は、明治安田こころの健康財団および科学研究費（基盤C）によって行ったものである。

また、彦根市教育委員会、並びに校長会の皆様、栄養教諭、特別支援学級の担任の先生方に心から感謝を申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省 「特別支援教育について」第1部集計編 (平成27年度版)、2015
- 2) 文部科学省 中央教育審議会 「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」、2007
- 3) 内閣府 「食育基本法」、2007